空に落ちる

spidergirl

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空に落ちる

【Ｎコード】
Ｎ９６５０Ｘ

【作者名】
ｓｐｉｄｅｒｇｉｒｌ

【あらすじ】
５月の雨上がり、私は空に落ちた。

5月のある雨上がりの午後、私は空に落ちた。それが初めてだった。

訳もなく気だるくなって、学校を抜け出してふらふらと散歩をしてみる。罪悪感と妙な満足感の入り交じった、まるで宙に浮いているような感覚が私の足を無意識に動かす。いつからかこの散歩が私のささやかなご褒美になっていた。

その日は、幼い頃よく遊んでいた公園に足が向いた。小さな公園で、滑り台と砂場の他に遊具はない。さきほどまで降っていた雨に濡らされた緑の匂いが鼻をつく。その匂いと遊んでいる一組の親子の姿に、幼いころのかすかな記憶が顔を出そうとしているのを感じた。

空を見ると、先ほどまで街を灰色に染めていた雲は消え、今はただぽつりぽつりと小さく白い雲が澄んだブルーを飾っている。

私は自分が雲であるという錯覚を起こそうとした。ただ風にまかせて、のんびりと空を漂うところをイメージする。風を感じようと両手を広げて目を閉じ、慎重に足を進める。

次の瞬間、私は空に落ちた。前から閃光と共に鋭い風が吹き付ける。しかし同時に、後ろから温かく優しい風が私を包み込んだ。甘ったるい匂いが立ち込める。何かが足元を濡らすのを感じた。何が起こったのか、私は分からなかった。確かなのは目の眩むような光の中にいることと、落ちているという感覚だけ。

始まりと同じくらい唐突に終わりは来た。私はもといた公園に戻っていた。辺りは先ほどまでと全く変わらないどころか、一秒たりとも時が進んでいないように見える。雨に濡れた緑の匂いも、遊んでいる親子も同じだった。

私は面食らった。確かに私は落ちたのだ。でもどこに？――――空に。

馬鹿げているのはわかっていた。しかし、全ては確かに起こったことなのだ。私の足は濡れていた。

私は学校へと向かった。今度は軽やかな足取りで。のし掛かっていた何か重く気だるいものが取り除かれたのだ。いや、単にそう錯覚しただけなのかもしれない。しかし、そんなことはどうでもよかった。私は空に落ちた。そして軽くなった。ただそれだけ。

それからというもの、私は頻繁に空に落ちるようになった。その度に何かが軽くなるのを感じた。学校を抜け出しての散歩の魅力

は以前とは全く質の違うものになってしまった。私はあの5月の午後に見つけた、新たな愉しみに魅了されている。しかし、心のどこかで常に恐れているのだ。空に落ちることができなくなってしまう日を。自分の中から何かが取り除かれるあの感覚をなくしてしまう日を。ただただ、恐れているのだ。

それでもなお、私は空に落ち続ける。もはや何の理由もなく。リピートされ続けるCDのように。

空は今日も青かった。

（後書き）

「空に落ちる」は、一見中身を持たない絵空事のようですが、自分への嘲笑でもあり、ある種の自虐でもあります。

初めての投稿なので出来は良くないと思いますが、ご指導お願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9650x/

空に落ちる

2011年10月27日09時08分発行